

**準奨励品種**  
**大豆「BL18-P」**

(農試技術部・県北分場・県南分場)

**1 来歴**

大豆「BL18-P」は、農試技術部で昭和60年に収集した二戸市在来種から純系選抜した黒平雁喰大豆である。平成4年に生産力検定予備試験、平成5年から農試本分場の奨励品種決定基本調査、奨励品種決定現地試験及び加工適性試験等を実施して特性を調査した結果、生育及び品質の安定性に優れた早生良質系統と認められた。

**2 特性の概要**

(1) 形態的特性(「玉山在来」及び「岩手雁喰1号」との比較)

- ア 主茎長は短く、分枝数は並である。
- イ 着莢数はやや多く、一莢内粒数は並である。
- ウ 粒の大きさはやや小さく、粒の光沢は強い。

(2) 生態的特性(「玉山在来」及び「岩手雁喰1号」との比較)

- ア 開花期は「玉山在来」より2~7日早い。成熟期は「玉山在来」より6~9日早く、「岩手雁喰1号」よりわずかに早い。同熟期の普通大豆は「フクナガハ」である。
- イ 蔓化しにくく、倒伏は少ない。
- ウ 子実収量は並~やや優る。

(3) 栽培特性

- ア 好適栽植密度は普通大豆より粗植である。
- イ 機械収穫適応性は「玉山在来」よりやや高い。

(4) 耐病虫性

- ア ダイズモザイクウイルス抵抗性はもたない。
- イ ダイズシストセンチュウ抵抗性は弱と判定される。
- ウ 立枯性病害抵抗性は中と判定され、「ナンブシロメ」並である。

(5) 子実の品質(「玉山在来」との比較)

- ア 百粒重は低温年を除きやや小さい。
- イ 遅延型冷害による未熟粒は少ない(平成5年調査)。裂皮粒の発生は少ない(平成6年調査)。
- ウ 加工適性は「玉山在来」並に優れる。

**3 準奨励品種に採用する理由**

黒大豆の多くは晩生の在来種を用いた慣行栽培で、熟期の遅れなどから生産が不安定になりがちで、産地では従来から早生の良質多収品種が望まれてきた。「BL18-P」は本県特産の黒平雁喰大豆で、代表的な産地の玉山村在来種と比べて成熟期が6~9日早い早生品種であり、同等の加工適性を有している。また、収量及び品質がより安定しており、蔓化が少ないなどの特性から、大型機械による収穫適応性も比較的高い。

#### 4 適応地域

県下全域（加工施設を有する地域、もしくは既存の加工施設に一元集荷が可能な地域）。

#### 5 栽培上の留意点

##### (1) 栽培法

ア 播種期及び栽植密度は以下を基準とし、圃場条件に応じて設定する。

栽培地帯	播種適期 (月・日)	好適栽植密度 (本/10a)
県中北部	5・15～5・30	5,000～7,000
県南部	6・1～6・20	

イ 施肥量は普通大豆並とし、極端な多肥を避ける。

##### (2) 目標収量と期待生育量

目標収量 (kg/10a)	主茎長 (cm)	着莢数 (莢/m <sup>2</sup> )	百粒重 (g)
210	45以上	250以上	40以上

##### (3) 大型機械による収穫技術

ア 豆・ソバ用コンバインによる収穫では、作業速度 0.64m/s で損傷粒は 0.8% と少ない。

頭部損失が 20.7% と多かったが、ビーンスラット（草丈の低いものに対応できるよう、リールに装着する部品）の装着により対応できると考えられた。

イ 玉山在来では蔓化及び莢先熟現象の発生があるため、総合的には本品種の方が機械適応性が高いと思われる。

(4) わい化病やモザイク病による減収を防ぐため、アブラムシ防除や種子更新を行う。

(5) 連作を避け、ダイズシストセンチュウ発生圃場では 4～5 年間は作付けをしない。

#### 6 試験成績概要

奨励品種決定基本調査（平成 5～6 年）

項目 (単位)	本場			県北分場		県南分場	
	BL18-P	岩雁 1 *	玉山**	BL18-P	岩雁 1	BL18-P	岩雁 1
主茎長 (cm)	52	56	61	68	77	79	90
分枝数 (本)	3.9	3.5	3.6	3.0	2.9	4.9	5.1
着莢数 (莢/m <sup>2</sup> )	306	289	282	377	362	428	494
百粒重 (g)	41.0	41.3	41.9	43.6	44.2	39.5	40.7
成熟期(月・日)	10・13	10・14	10・20	10・6	10・5	10・17	10・15
倒伏程度	微	微	微～少	微	微～少	少～多	多～甚
子実重 (kg/a)	21.4	21.2	18.5	23.2	23.6	23.6	21.4
同上比 (%)	101	(100)	87	98	(100)	110	(100)

\*岩手雁喰 1 号 \*\*玉山在来